

惨と破滅に陥し入れるだけである。にもかかわらず、なおも、自分は善に努力しているのだと自負するなら、これほど愚かなことはない。このような事態をパウロは「命をもたらずはすの掟（律法）が、死に導くものであることが分かりました。罪は掟（律法）によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟（律法）によってわたしを殺してしまつたのです」と告白する。

このような律法主義的生が持つ欺きに、私たちは警戒しなくてはならない。この世の論者の多くがこの罠にかかる。また、熱心で誠実な宗教人や信仰者が、その実、この欺きに生きていることに全く気づいていないことがある。とにかくパウロは「律法主義的生」の根源に、利己的自我が人の主体であるかのように君臨し、それに全く気づかずに生きている者の愚かと悲惨、さらに罪と死とをそこに見た。

×

×

パウロをして「律法主義的生」の問題性に気づかせたものはなんなのだろうか。それは、「私」の真実の主体が利己的な自我ではなく、命の滾りとしての神そのものであることの開眼による。それを彼は「キリストがわたしの中に生きている」と言った。このように自分を生かしている真実の主体への開眼は、律法主義的在り方の欺瞞性を暴くと同時に、律法を含めた一切の善なる事柄が何処から出てきて何を示しているのかという根拠と目的とを領解させた。彼は自分を自分たらしめている真の主体が何であるかに開眼した。それは宇宙の根拠に開眼したことであ

り、永遠の過去と未来、そして現在の根拠の開眼でもある。そのような根拠に生きることを、「キリストがわが内に生きている」と表現した。

×

×

「義と認められる」とか「贖あがなわれる」とか「罪人」とかいう聖書概念はすべて神と人（イスラエルの民）とが交わした「契約」、つまり神と人（イスラエルの民）との共存の合意としての「律法」を前提として成り立っている。

ちなみに「義」とは、神と人（イスラエルの民）との間に交わされた「契約」を果たすこと、即ち律法を守ることである。そして、その「契約」に違反すること、すなわち「律法」に違反することが「罪」なのである。さらに、民が律法違反の罪を犯すとき、神が厳然と裁きを遂行することも「義」である。さらに、民が罪を犯しその罪を罪として裁きを遂行するために、民に代わりイエスを罰することによって「律法」を厳守すると同時に、民との共存を成し遂げられた事が「贖い」であり、そのこと自体をも「神の義」だとパウロは言う。

神はキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を贖う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためでした。（ローマの信徒への手

規則（律法）によってわたしたちを訴えて不利（罪）に陥し入れていた証書（律法の規定）を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いて（抹消して義として）くださいました。（コロサイの信徒への手紙二章一四節）

×

×

このように神と人との契約である「律法」を前提としているのが、聖書の宗教であり、パウロの信仰である。しかし、すでに何度も言ってきたとおり、パウロ以前の原始使徒たちは、人は皆、律法違反の罪を犯して神の栄光、つまり救いを受けられなくなってしまうが、神はキリスト・イエスを立て、十字架につかせ裁くことによって、人の罪を償う供え物、つまり裁かれるべき人の身代わりとすることによって人を救い給うたのだと、イエスの死を解釈した。従ってここでのイエスの十字架による死は、律法違反の罪に対する贖罪という意味に理解されている。それは、贖いによって人は神に義とされるといふ信仰である。といふことは、人は律法を完全に守ることによって神に義と認められるという「律法遵守合格主義」つまり、律法主義的救済の論理が根底にある。それに対してパウロは、イエス・キリストを信じることにより、恵みとして無償で与えられる神の義を説く。つまり、原始使徒達の贖いによって義とされる信仰に対して、パウロは、「信仰による義」を説くことによって、律法からの開放と自由を徹底したかたちで説く。つまり、「律法遵守合格主義」とは異なったイエスの死と復活理解をしたことになる。とすると、律法遵

守合格主義を根拠として成り立っている「義」とか「罪」また「贖罪」といった事柄が、根底から崩壊することになるばかりか、「律法」そのものの意味も変わって来る。事実彼は、はっきりと言う。

人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、キリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によつては、だれ一人として義とされないからです。(ガラテヤの信徒への手紙二章一六節以下)

わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを、ますます深く知り、その苦しみにあ預かって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中から復活に達したのです。(フィリピの信徒への手紙三章九節以下)

パウロは、はっきりと「律法の実行によつては、誰一人として義とされない」という。それどころか、

命をもたらずはすの掟（律法）が死に導くものであることが分かりました。（ローマの信徒への手紙七章十節）

と言い、さらに、コリント信徒への手紙二 三章六節では、

文字（律法）は殺しますが、霊は人を生かします

とも言う。

×

×

このような律法による義の否定は当然のこととして、それに基づく罪や義や贖罪、または律法
の概念も、従来の意味が失われるか変容されるのは当然のことである。事実、義の意味も「贖罪
による義」つまり律法遵守合格主義による義であった内容が、「信仰による義」となる。この場
合の義は、決して贖罪を信じることによる義ではない。このところを曖昧にしてはならない。
また、罪の意味も、律法違反の罪ではなく、むしろ、律法を遵守することによって自分を神の前
に立てよう、とする事自体が罪なのだ、すでに述べたローマの信徒への手紙七章でパウロは情
熱を込めて告白している。さらに、律法についても、パウロは「神との契約としての律法」では

なく、すべての人間の内面意識の中に記されているものなのだと、次のように律法の拡大解釈をおこなっている。

不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神をすることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。……たとえ律法を知らない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくても、自分自身が律法なのです。こういう人々は律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。(ローマの信徒への手紙一章十八節～二章十六節)

×

×

パウロの信仰を理解するに於いて、とまどいを覚える一つがある。彼はキリスト・イエスの十字架の死を律法による義に基づく「贖罪死」とする解釈から離れることなく、それを抱え込んだまま「信仰による義」を説くのである。しかし、律法からの開放を知り、律法主義つまり「律法遵守合格主義」を「キリスト・イエスを信ずる信仰」により克服したはずのパウロが、律法主義を根拠として成り立つ「贖罪」を捨てきれないところに、彼の福音理解に矛盾が生じる。この

一点をどのように理解すればよいのかということが、パウロの信仰を厳密に、つまり伝統的な福音理解の先人觀をもたずに、学ぶ人達を悩ましつづけてきた問題である。パウロは自分から表明しているとおり、ガマリエル門下に学んだ生粋のユダヤ的伝統に生きる「ヘブル人の中のヘブル人」である。しかし一方、タルソというギリシャ文化豊かな町でヘレニズム文化を身につけ、ギリシャ語に堪能でローマの市民権を持つ特権階級に属する知、情、意に優れた人であった。彼のこのような生い立ちから見ても、キリスト者になった後、他の使徒達とは異なり異邦人の世界（ユダヤ人以外の世界）に伝道する使徒として用いられるようになったのは当然のことといえる。彼は次のように告白している。

キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロ……わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。（ローマの信徒への手紙一章一節以下）

まさに彼は生涯を異邦人伝道のために、アンテオケ市を起点とし、地中海を利用してローマに至る世界を三度も伝道し、その艱難辛苦の生涯を神と人との喜び捧げ尽くし、遂に殉教して天に凱旋して行った。彼を抜きにしてキリスト教の歴史を語ることは出来ない。このようなパウロで

あつたからこそ、自分が受けた福音の内容を、他の使徒達の誰よりも、その本質を掴み、体系的にそれを明確化し、展開していったのだらうとおもわれる。では、彼はどのように福音の本質を踏まえて、展開していったのだらうか。

×

×

謙虚な態度で、神を敬い真理を愛し、誠実に生きることを人間の理想だと信じ、そのような自分であろうと努力している方がおられる。そのような人を世間は称賛する。しかし、パウロが求道に於いて発見したことは、その生き方こそ、最も忌むべき人間のエゴイズムの姿に他ならないということであつた。

謙虚な態度で、神を敬い、真理を愛する誠実な人であろうとする生き方が、なぜエゴイズムなのかと人は問うだろう。しかし、正に、そのように思い込んでいるその思い自体が、エゴから生まれているのだとパウロは看破する。そうして、その思い込みこそ、本来の人間の在り方の正反対の有り様だと彼は言う。

神の前で律法を死に物狂いで遵守したのがパウロであつた。事実彼はその律法を落ち度なく守つた。そのことについて次のように語る。

わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身へブライ

人の中のヘブライ人です。律法に関してはフアリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。(フィリピの信徒への手紙三章五節以下)

彼がここで掲げる一つ一つは彼の人格高潔、道徳的完全者の姿を示している。にもかかわらず、否、それ故にこそ、彼は、自分の姿に、救いがたい人間の罪を見るのである。

×

×

パウロが真剣に問うた一点は、「律法による義」であり、その克服である。律法による義についてはすでに幾度も述べてきたので繰り返さないが、要するに、神が人との契約関係において与えた共存(救い)の条件としての掟を遵守して生きることによって、人に与えられる神の義認のこと、又は律法によって自分の義を立てようとする生き方が、「律法による義に生きる」ということである。

パウロはユダヤ教徒であった時代、先に述べているように「律法による義」を壮絶に生きた。しかし、彼はそのように生きる自分に、忌むべき罪の姿を見たのである。それは、ただ自分個人という特定の者の生き方のこととしてではなく、正しくあるうとする宗教的生は勿論、人間一般の道徳的生の、在り方そのものに関わる問題性に開眼したのである。

「律法による義」を生きる自分の内に忌むべき罪の姿をパウロは見たと言ったが、特に彼が不
道徳な罪を犯したとか、反社会的な犯罪を行ったとかいうのではない。それどころか彼は「同輩
の誰よりも掟に忠実に生きた」のであり、だからこそ、彼は律法主義的生が秘めている問題性を
見抜くことができたのである。なにごとにも於いても、そのものごとにも徹底するとき、そのものが
秘めている善悪の部分が覚えてくる。ものごとにも徹底する為には、ただ熱情だけでなく、深い洞
察力がなければならぬ。ただのお人好しだけではだめである。鋭く問題性を抉り出す知性や厳
しく自分を含めたすべてを突き放す客観性も必要である。さらに、真にものごとに対して徹底者
たる者に必要なことは霊的眼力であろう。とにかく、徹底することなく徹底したと思ひ込み、そ
こに留まって満足している者は、必ず傲慢の罠に陥り、独善の淵に沈むことになる。ましてや伝
統的な教条や常識に埋没して、なんの疑問も抱くこと無くただその内に於いて熱心であったり、
流されて反復同語の日々を送る者は何も見ることは出来ない。その点パウロは、原始教団におい
て特異な存在であった。それ故にこそ、彼は、律法主義が秘めている、人格を殺すという問題性
を明確に出来たのである。

×

×

それについて正面から語っているのが先にもあげたローマの信徒への手紙七章七節以下である
が、この箇所は古来解釈する上でいろいろと議論されてきた所である。専門的なことについては、

私などが出る幕ではないので、それなりの研究者に問うていただければよいのだが、何が問題になっているのかということだけかいつまんで言うと、七章七節以下でパウロが記している「わたし」とは誰のことかということと、この告白はパウロの回心以前のことなのか、以後のことなのかという二点についてである。

この二点についての解釈は、専門家ならずとも、聖書を読み、パウロの信仰を問うことによつて、自分自身の信仰の在り方の態度決定をしようとする者にとつて、それなりの自分の解釈が要求され、且つ必要とされる事柄である。いうならば、その解釈如何によつては、所謂福音理解と信仰の在り方に微妙な違いが生ずることになる。

そこで、一応私自身の態度を結論的に記すに止めて次に進むことにする。このパウロの告白は彼の福音理解からいつてどういふ回心後の状態を語っているのではなく、回心後に立つて回心前の状態一般を語っていると思われる。また、「わたし」と言う場合、それはパウロ自身のことであるが、その「わたし」とは、同時に「普遍的なわたし」をいうのである。なぜなら彼が語る「わたし」は、けつして個人的な特殊な心的状況のことではなく、人間一般に関わる普遍的な人間存在の心的状況に連なっているからである。それだからこそ、パウロの告白が、広く人間一般の告白に連なり共感共有できるのである。これらのことはパウロの信仰告白ともいふべき書簡を読むときあきらかになつてくるのではないかと思う。

さて、ローマの信徒への手紙七章に於いて、それを読む者に強烈に響いてくる言葉は、十五節以下の言葉である。

×

×

わたしは、自分の行なっていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行なっているとすれば、律法を善いものとして認めていることになりません。そして、そういうことを行なっているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行なっている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしてるのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪がつきまとっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを五体の内とりにある罪の法則の嵐にしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このよ

うにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているので
す。

このパウロの言葉を聞く者は、パウロ自身があたかも自分の意志と行為の矛盾葛藤を、激烈に
告白し、その矛盾の中で悩み苦しんでいるかのように受け取る。事実、そのように多くの人は
受け取って来た。しかし、ここでパウロが告白していることは、もつと深く律法遵守の行いその
ものに潜んでいる、恐るべき罪の働きに対する、深く鋭い洞察の結果、ま扶り出した偽善について
なのだ。それは、律法を努力して遵守し、自ら神の義に生きていると思いきや、なんのことも
のように努力している自分は、自分自身で自己完成させようとする、まさに神への方向とは正反
対の自己高揚の罪の働きそのものになっていた、というのである。ここにこそ律法主義の本当の
恐ろしさがあり、それをパウロは看破した。

×

×

「文字は「人を」殺し、霊は「人を」生かす」とパウロは言う。（コリントの信徒への手紙二
三章六節）

彼がいう「文字」とは直接的には「神の律法」であり、その律法を自分の生き方の規範とする
在り方、つまり律法主義的生は、人を本来の生き方から脱落させてしまうことに気づいた彼は、

それ故に「文字は人を殺す」と言った。

かつてのパウロは、律法を守り、それに則して生きることこそ、人が人らしく生きる最も正しい生き方だと信じ、その生き方に専心徹底した。それについて彼は自ら次のように言う。「律法の義（遵守）については非のうちどころの無い者」だったと。彼の精進ぶりが尋常なものでなかつたことが伺い知れる。（フィリピの信徒への手紙三章五節以下）

しかし、そのような壮烈な生き方のただ中で彼は、「その熱心さは、深く徹底した認識に基づくものではなく」（ローマの信徒への手紙十章二節）「むさぼり」にすぎないことに気づいた。

（ローマの信徒への手紙七章七節以下）

では、彼が自らの熱心な生き方に於いて見い出した問題性とは如何なる事柄であつたのか。この一点はパウロの信仰理解において大切な事柄である。

×

×

先に、ローマの信徒への手紙七章について述べたとおり、彼は、「貧^ひるな」という律法の示しに対して「そうだ、わたしは貧るまい！」と努力し始める。しかし「わたしは貧まい！」と努力するその事自体が、既に「貧り」そのものに他ならないことに気づいたのである。つまり、「貧るまい」という自分の力みこそ、自分で自分自身を神の前に正しく立てようとする自我高揚そのものであることに気づくのである。この自我高揚の姿を彼は「この熱心さは、深く徹底した

認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず自分の義（自分で自分自身を善しとする正しき）を求めようとして、神の義（神が善しとされる正しき）に従わなかつたからです」と告白する。（ローマの信徒への手紙一〇章二節以下）

ここでパウロが問題にしていることは、自分が善しと定めた事柄を自分の生の意味、または目的として、そのような自分であろうと努力する、そのことが、まぎれもなく人間の自我が作りだす虚構であり、神が願われる人間の在り方の対極、つまり正反対の生の姿に他ならないということである。

×

×

彼はコリントの信徒への手紙一 十三章で「人が全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、また、誇ろうとしてわが身を死に渡そうとも、愛がなければ何の益もない」と言う。だが、わたし達は「人が自分の全財産を貧しい人々のために使い尽し」ましてや「我が身を死に渡すほどの行い」は、それ自体「愛」ではないか、と思う。しかしパウロは、そこに愛が無ければ一切は無益なことだ、と言い切る。彼がここで問題としていることは、その行為そのものがどれほど立派でもそれが自我高揚の場から生み出されたものであるならば、それはただの自我が生み出す願望であり虚構に他ならず、それによって自分も他人も救うことは出来ないというのである。また、彼は言う。「たとえ、「神の靈に満たされたと言つて」不思議な言葉を語り、天使たちの言

葉を語ろうとも、愛がなければ、それは騒がしいどらややかましいシンバルだ。またたとえ、「神の靈に満たされて」予言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていても、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰をもつていようとも、愛がなければ、無に等しい」と。

パウロはここで「ただの愛」を説いているのではない。彼が言う「愛がなければ」とは、自我高揚的な利己的在り方を超えた、本来の人間の在り方に立たなければ、一切は無に等しいというのである。

人が、靈に満たされたといつて不思議な言葉を語り、超神靈による言葉と、そして天使のような力を示せば、人々はその人を神の人のように讃える。しかしパウロは、そのような人を「騒がしいどら、喧ましいシンバルだ」と言い切る。

また、たとえ予言者のように言動し、人々を驚愕させてもさらに、山を動かすほどの超能力を身につけて、神秘にその身が包まれており、あらゆる神についての知識と能力を行使できようとも、自我高揚の利己心の延長線上の在り方から生じる事であるなら、それは虚構であり全く空しいことである、と言い切る。

しかし、多くの人々は、それらに驚き、そこに群がる。彼らの心情は、利己的自我実現の要求であり、その欲望に振り回されているだけである。かくして、与える側も、求める側も所詮は自我が生み出す虚構に空しく振り回されているだけである。

×

×

信仰とは、自我高揚の延長線上にある事ではない。望ましい自分の姿を思い描き、そのような自分になろうと自分で努力することが自我高揚である。宗教の人は時として、その宗教の教えに則して、望ましい自分の姿、在り方、生き方を自分の思いで描く。また、道徳の人や信念の人は、自分が善しとした理念や主義や主張に基づいて、自分の在り方を思い描く。そして、それぞれに思い描いた姿を理想像として自分に一致させようとして専心努力する生き方を、人間の最善の生き方だと確信する。しかし、その実体は全て自我高揚として造り出した虚構なのである。そのような人々はあたかもドンキ・ホーテのごとく、その自我高揚が造り出した虚構の対象に向かつて、こそ真面自に、真剣に、熱心に突っ走る。その姿を人々は熱心とほめそやし、当の者もその自分の姿に酔う。彼等は、自分が造り出した自我高揚としての虚構を、絶対の価値尺度として、その論理ですべてを裁く。彼らは不寛容であり、独善であり、排他的である。彼らはそのように在ることが真理に生きることだと傲慢を崩すことはない。それにしても、このような人達が、宗教や信仰の世界は言うに及ばず、主義主張の世界、世間の常識人たちの中に何と多くおいでになることか。

パウロは己の律法主義的生に、この自我高揚の「貧^{むさぼ}り」を見い出したのだ。言うならば、「おまえの、一切は自我高揚の延長線上に、おまえが構築した虚構に、自分を則して熱心に生き

ているだけではないのか」という問いを、パウロをパウロとして生かす真の主体から、鋭く突きつけられたのである。

パウロは徹底した自己否定を迫られたのである。しかし、人は時として、自己否定ということをも、自我高揚の延長線上で行いながら、それに気づいていないことがある。自我は常に、自分の確保、自分の充実、自分の完成、自分の栄光をその根底に秘めている。そのような自我が自分の主体としてあり、その自我が崩壊することは、自分の存在理由を完全に消失させることになる。と、(不安を抱きながら) 確信している。だから、自我は何時でも何処でも、自分自身に配慮する。その意味で自我は極めて利己的な存在である。このような自我の否定こそ、本当に自分を自分として生かす主体に開眼する道なのである。だが、真の自己否定は自己自身でなせる事ではない。本当の自己の主体との出会いに於いて生ずるのである。

パウロに於いてこの事が生じたのが、すでに幾度も述べてきた、ダマスコ途上の出来事、即ち復活のキリストの顕現に於いてであった。それは、十字架上で死なれたイエスの復活体にただ出会った、という出来事ではない。そのような外面的な出来事に惑わされているようでは、ただか「びつくり信仰」であり、「しるし信仰」の域を出ることはない。彼が復活のキリストの顕現

の迫りに接することで生じた事は、彼の主体である自我が徹底的に破壊され否定されると同時に自己の本当の主体の何であるかに開眼せしめられた。言うならば、彼の全存在に於いて生じたことは、自分の存在の本当の主体が「わが身」即ち自我に対して露あらわになった、ということである。彼は、自己の本当の主体が何であるかを知らないままで、神を語り、律法を守り、信仰に生きていた。しかしそれらは所詮は自我高揚への「むさぼり」の道程でしかなかった。今日、宗教の世界以外は言うまでもないが、宗教信仰に於いてすら、この道を熱心に歩むことで「神」又「福音」に生きていると錯覚している方々がおおいでにならないとは言えないと自戒している。

十二 パウロが提示した二つのこと

パウロがわたしたちに提示したことが二つある。一つは「人は、律法を實行することによって義とされない」。もう一つは「人は信仰によってのみ義とされる」という事である。

この二つの事柄が持つ意味はとても大きい。一つは、人間や世界にとって何が問題なのか、ということであり、今一つは、どう生きればよいのかということである。それは、人間の在り方への解答である。

×

×

人は、律法をによつて義とされないと、自分の知恵や身体をどれほど用いても、まともな人間になることは出来ず、平和な世界も実現することはない、ということである。だが、人は言うだろう。人間には知恵があり、感情があり、意思があるではないか。それらの能力を振り絞り、努力して用いるなら必ず人も世も救われるに違いないと。しかし彼は「救われない」と言う。そればかりか、人が、そのような考えに留まつているからこそ、救われないのだ、と言う。

パウロの人間や世界に対するこのような態度は、人間らしく生きたい、幸いな世界であつてほしい、と願つてゐる私たちにとつて無関係ではない。何故そのようにパウロは言い切るのか。

×

×

パウロが人間を観、人間を語るときの態度は既に何度も述べたごとく、抽象的観念的且つ樂觀的なそれではなかつた。彼にとつて人間を語るとは人生を語ることであり、自分自身の生にまつわりつく悪を語り、偽善を語り、さまざまな罪と悲惨と死とを語ることであつた。つまり、きれいごとの自分を語るのではなく、弱く忌まわしい自分のありのままを観、語ることであつた。

それは、人間の利己的な自我の働きそのものの、救いがたい罪なる自分を語ることであつた。それ故に、「人は、律法を実行することによつては義とされない」という提示は、一切の人間の樂觀主義的な知的、情的、意思的な努力によつて義とされる可能性の限界を、その究極に於いて示したことに他ならない。それは、正にパウロ自身の全存在から発せられた悲痛な叫びである。彼

は次のように告白する。

ああ、わたしという人間は、全く悲惨だ。この死のからだから救い出してくれるものはないのか。(ローマの信徒への手紙七章二四節)

×

×

「人は、律法の実行によって義となれない」とパウロが言うとき、人間自我の可能性に絶望したというだけではない。彼は、絶望のそこに「神に裁かれる」悲惨な自分、即ち「神の怒り」によって虚しく滅ぶ人間の罪深さを観ているのである。

不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から聖なる怒りをあらわされる。……あなたは、神の裁きを逃れられると思うのか。神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのか。あなたは、かたくなで心を改めようとせず、神の怒りを自分のために蓄えているのだ。この怒りは、神が正しい裁きを行われる怒りの日に現れる。(ローマの信徒への手紙一章十八節以下)

×

×

彼の絶望は、決して観念の遊戯としての絶望ではない。世の中には、絶望してなお自分自身で

ありつづけるような絶望がある。つまり絶望している自分自身を觀賞し、その悲惨を楽しんでいる自我に留まる絶望。それこそ偽善であり、貧^{むさぼ}りであり、自我高揚のなにもでもない。しかし、パウロは心底人間自我の可能性に絶望したのだ。

×

×

パウロは言う。

知恵ある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論者はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。世は自分の知恵で神を知ることにはできない。(コリントの信徒への手紙一 一章二十節)

この世の論者は、人間の救いを知っているかのようにさまざま論陣をはり、手だてをする。しかし、それらは所詮、人間自我から生ずる戯言^{たぶら}に過ぎない。人も世も虚しく過ぎ去り、救いがない事態は少しも変わることもなく、人間の悲惨はただ繰り返すのみである。

×

×

確かに「人は、律法を實行することによって義とされることはない」。この人間についての洞察は深く鋭い。パウロがこの自覚を得たのは、自我による知恵によるものではなく、その自我に

絶望し、自我を完全に放棄したその底で、自我を支える本当の自分の主体に開眼させられたことによる。その間の事情は微妙である。自我の放棄と自己の眞の主体の現成とは同時である。自我の放棄が眞の主体の発見を生み出させ、主体の現成が自我の虚構性を気づかせた。それは同時である。しかし、その出来事的一切は神の計らいにある。この出来事がパウロの身に生じたのが、かのダマスコ途上であつた。

×

×

ダマスコ途上に於けるキリストの顕現について、パウロはガラテヤの信徒への手紙で次のように言う。

わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出して下さった神が、御心のままに、御子をわたしの内に示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされた。(ガラテヤの信徒への手紙一章十五節以下)

彼が出会つたのは復活のキリストである。この世の一切の事柄、即ち生に関わるもの、死に関わるもの一切を無化する、しかしすべてに内在し、それをそれたらしむる神の命そのもの、始めであり終わりである天地の命そのものが、墓の中で朽ちているイエスに於て現成した出来事こそ「復活」であつた。その復活の命こそキリストである。パウロはその畏敬すべきキリストを「わ

たしの内に「直接経験したのである。「示して」とはそのキリストがパウロに「露あつわにされた」ということである。この一点は極めて重大事である。

十字架上で亡くなり、墓に葬られたイエスが、再び生き返って来られた姿に、ただ出会い、ただ見たのではない。その出来事に驚愕して、イエスを信じたのではない。そのような信仰は先にも言ったが「ただの、びっくり信仰」であり、「しるし信仰」の域を出ない。

パウロは確かに、自分の内に観たのである。自分の内に知ったのである。自分の内に露あつわにされたそれを自分の全存在で直接経験したのである。それは何であったのか、おそらく彼はその確かなそれを、しかし、未だ言葉にならないそのままのそれを、即ち直接経験した「事」を、深く露もやにつつまれたそこにそれらしく命しつつ白光する玉を、これ全身眼と化し、慎重に凝視するよ
うに、思いめぐらしつづけた。

彼は言う。

御子をわたしの内に示し、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、直ぐ血肉に相談するような事はせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いた。(ガラテヤの信徒への手紙一章十六節以下)

真に、天よりの啓示に接した者は、必ずその啓示によって開眼させられた思いをもって、深く重く長く、その「事」に思いを巡らす。それは祈りであり、霊想である。正にパウロは二年以上アラビヤの地で退修の時をもった。

×

×

その結果、彼自身に露あつらになったことは、自己の真の主体への開眼である。彼は万感の思いをこめてそれを言葉する。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。(ガラテヤの信徒への手紙二章二十節)彼は、遂に観るべきものを観、立つべきところに立たされたのである。生きるということ、否万物が存在するということの秘儀に開眼させられたのである。

×

×

先に何度も述べたとおり、使徒パウロの生は、復活のキリストの顕現に接して一変した。それは彼の生の質的転換であつてたんなる自我レベルでの認識の基準の変化ではなかつた。

私たちはときとして、自我レベルでの認識の基準の変化をもって「悔い改め」と思うが、それはただの後悔であり反省であり、そのレベルでの生き方の変化にしかすぎない。これについてパウロは次のように言う。

神の御心に適^{あた}った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらず。(コリントの信徒への手紙二 七章十節)

彼がいう「世の悲しみ」こそ、たんなる自我レベルでの認識の基準の変化であり、そこでどれほどの反省や後悔、考え方や生き方を変化させたとしても、その人間を救うことはできず、空しい死に追いやるだけであると言う。結局彼がいう「世の悲しみ」とは律法主義的生であり、自我による計らいの生のことである。一般的に言えば「道徳主義的榮為」のことである。私たちはここで、もう一度「律法による義」と「信仰による義」との違いを峻別しておくことが大切である。

パウロに起こった出来事は、まさに「神によつて取り消されることのない救いに通じる悔い改め」であった。そして、パウロにおける「悔い改め」の意義はイエスの死と復活との関連に於いて説かれている。即ち、罪に対して死に、キリストと共に生きることであり、(ローマの信徒への手紙六章)また、新しい人を身に着けるといふことでもある。(エフェソの信徒への手紙四章)その意味において、悔い改めとは「救いに通じる」ことなのである。

悔い改めは「生じさせられる」ことである。それは、罪に死に、キリストと共に生き、新しい人を身に着けることと同時に生ぜしめられる我が身の全存在に於いて起こる出来事である。パウロは自分自身に起こったその出来事をつぎのように語る。

恵みによって召しだしてくださった神が御心のままに、御子（キリスト）をわたしの内に示された。

（ガラテヤの信徒への手紙一章十六節）

それは他でもなく、キリストがわたしの主体となってくくださった、という意味である。だからこそ彼は告白する。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内におられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子にたいする信仰によるものです。（ガラテヤの信徒への手紙三章二十節）

×

×

キリストがわたしの内におられるとは、キリストがわたしの内で同居しているということでは

ない、つまり互いに異なるものが一緒に居るといふ状態ではない。またキリストがパウロの人格にとつて代わつてしまふという意味におけるキリストの憑依ひょういでもなく、キリストがパウロの主体の根拠となつたといふことである。つまり、パウロ自身の主体の営みがキリストの働きに基づいて成り立ち働いているといふことである。そしてそのことに於いて、パウロは本来の彼自身に成らせられるといふことでもある。つまり、キリストが自己の生の主体であることの覚醒において、それまでの自己の在り方の誤りに気づかせられたのである。まさに「悔い改めを生じさせられた」のであり、それは、「取り消されることのない救いに」自分をおくことになる。

十三 「キリスト」 *Christus*

「キリストがわたしの内におられる」といふことをもう少し明確にするために、ここで、「キリスト」と表現されていることを考えておこう。パウロを悔い改めに導いた決定的な出来事である、ダマスコ途上における復活のキリストの顕現は、歴史的な存在としてのイエスが、再び息をふき返し墓場から生き返つて、彼の前に出現したといふことではない。彼に顕現したのは「復活のキリスト」である。キリストとは、ヨハネによる福音書に即していうなら、ナザレのイエスといふ歴史的な人格として受肉したロゴスそのものである。

始めに言^{ロゴス}があつた。言^{ロゴス}は神と共にあつた。言^{ロゴス}は神であつた。……言^{ロゴス}は肉体となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。ヨハネはこの方について証しをし、声を張り上げて言つた。「わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしより先におられたからである。……恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。(ヨハネによる福音書一章一節〜一八節)

このように、ロゴスは一切の存在が存在としてあることの根源である万物の創造者なる神の定めとしての「恵みと真理とに満ちているもの」であり、その定めが歴史的な事実として、この世に於いてとつた相応な現れが、まことの神であり、まことの人であるイエス・キリストなのである。即ち、「言^{ロゴス}は肉体となつてわたしたちの間に宿られた」のである。

この場合の「イエス・キリスト」とは、「キリストを生きるイエス」ということなのだが、「キリスト」と「ロゴス」との関係は、ヨハネ福音書に於いても明らかなどおり、ロゴス(言)とは原始キリスト教団によつてキリストと名付けられる以前の呼称である。従つてロゴスを先在

のキリストと言われ、イエスとして受肉したロゴスの働き、命の営みそのことを「キリスト」というのである。

「ロゴス」とはもともと、なにか重要なことを「言う」を意味する言語から派生した名詞であり、単にお喋りや命令などではなく、「声明や論述」のことであると研究者は言う。だとすると、ヨハネがロゴスを「言」という意味で用い、その言の受肉を「イエス・キリスト」と言い表したことは「キリスト」の何なのかを的確に示したといえる。即ち、「言」とは、それ自体語るものと自己同一であり、語るものの意志そのものである。だからこそヨハネによる福音書は「始めに言があり言は神と共にあり言は神であった。」と言う。そして、「言」はそれ自体「声明し論述」していることとして働いているのであるから、言の受肉としてのイエス・キリストはそれ自体、神の意志を声明し論述している働きそのもの、即ちイエスとして受肉したロゴスが、まことの神、まことの人なのである。

×

×

ここで間違つてはならないのは、キリストそれ自体が自己同一的に神の意志を声明し論述している働きその事であり、決して、神の意志を声明し論述しているものなのではない。つまり、神の意志と声明論述事とが不可分であり不可同の関係であるということである。このことは「神」と「キリスト」との関係を表している。

とにかく、神の意志、の声明と論述であるキリストは、以上の意味からいえば、それ自体の働きとしての内容を持っている。したがって働きは一定の躍動を内容としているのだから、キリストはそれ自体神の意志としての定めまたは原理としての在り方をしており、そのキリストに人が開眼するとき、存在そのものの在り方、つまり、どのようなにあるべきか、というために気づくのである。そして、そのために気づかせ、その定めを成就する働きを「聖霊」がなすのである。即ち「霊は、神の御心に従って、聖なる者達のために取りなしてくださる。神を愛するものたち、つまり御計画に従って召された者たちには、共に働いて下さる」(ローマの信徒への手紙八章二七節)。「イエス・キリストによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを開放した」(ローマの信徒への手紙八章二節)つまり「聖霊」はロゴス(キリスト)を成就する働きであって、人間の自我による計らいである思惟によってキリストに開眼するのではない。聖霊によらなければ、だれも、「イエスは主(キリスト)」と言えないのである。(コリントの信徒への手紙一 一第二章三節)

×

×

キリストとは、動的な働き即ち「事^{コト}」である。しかし、人は、キリストを実体的且つ対象的にとらえようとする。パウロが、「私にとって生きることはキリストです」(フィリピの信徒への手紙一章二一節)と言うとき、彼はキリストを根源的な命の営み、命の滾^{たぎ}りその事として語って

いる。彼が復活のキリストの顕現に接して開眼したことは、自我を超えたより深い根源的な自己の生の営み、命の滾りその事だった。このような、自己の生の事実を「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられる。」（ガラテヤの信徒への手紙二章二十節）と言ったが、さらにその生を単刀直入に言語表現したのが「私にとって生きること
はキリストです。」であった。

×

×

「私にとって生きるとはキリストです」とパウロが言うとき、彼の生そのものの命の営みのすべてがキリストなのです、というのであって、キリストに支えられてとか、キリストに導かれているとかというような、自我に対してキリストが対峙している関係を語っているのではない。

×

×

だが、それは自我が消滅してキリストだけの生であると言っているのではない。それは神秘的な合一の世界であって、現実否定の独善且つ幻想的な熱狂主義となる。「生きることはキリストです」とは、生きる私の営みがそのまま、私が生きる営みでありつつ、即キリストの命の滾りによって成り立っている、ということである。先に述べた表現で言えば、彼は自己の究極の主体がキリストであることに開眼したのである。

×

×

この自我を超えた自己の主体であるキリストの世界、つまり究極の命の滾りのそこは、まったく自由そのものの世界である。パウロはそれを次のように言う。

あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたたちがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。(ガラテヤの信徒への手紙三章二六以下)

男だ、女だ、罪人だ、義人だ、ユダヤ人だ、ギリシヤ人だと分別するのが自我の世界である。それは自我による価値判断と認識の世界に生じることである。律法主義的営為えいゐはその最たることであろう。このように自我の働きは、それが善悪にかかわらず、このような形を呈する。しかし、その自我を超えた自己の根底にはキリストが働きとして躍動しているのである。その世界は自由の世界である。自由とは、一切の分別から開放されて、それがそのまま真にそれであり得る世界である。男だ、女だ、ギリシヤ人だユダヤ人だ、と分別し、価値付けする世界ではなく、それがそのまま、真にそれであり得て、同時に一つであり、全体でありうる世界、そのように命している事としての世界こそキリストなのである。その姿は自由というほかない。だからこそ、パ

ウロは言う。

この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった。だから、しっかりとしなさい。奴隷の軛くびきに二度とつなぐてはなりません。兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。(ガラテヤの信徒への手紙五章一節以下)

×

×

キリストが働くところには自由がある。しかし、その自由はそのまま自由であるのではなく、自我を超えた根底に働くキリストそのものを、自覚的に自我の世界で得ることによって、はじめそれは自己に現成してくる。その時の自我は古いただの自我ではなく、「キリストを着た」本来的な自我だといえる。それ故に「だから、しっかりとしなさい。(古いただの自我である) 奴隷の軛くびきに二度とつなぐてはなりません」と言い、また、「この自由を、肉の罪を犯させる(古いただの自我の働きの) 機会とさせずに(キリストの働きに促される) 愛によって互いに仕えなさい」と自覚を促したのである。そして、そのような自覚に生きる本来的な自我の現成を、次のように言った。

キリストに結ばれている人はだれでも、新しく創造させられた者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。(コリントの信徒への手紙二 五章一七節)

この生の現実こそ、「私にとって生きることはキリストです。」ということであり、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」ということに他ならない。

×

×

「私にとって生きることはキリストです」と言うとき、私という事の内も外もその全存在が「キリストにおおわれて(着て)いる」ことであり、「キリストに結ばれている」ということである。それは、「キリストがわたしの内にいる」と同時に「わたしがキリストの内にいる」ということでもある。この場合、「キリストがわたしの内に」とは、「わたしの根底に、わたしの命そのものとしてしている」ということ。即ちわたしの主体として働いていると観ることである。そして、「わたしがキリストの内に」とは「わたしの外に、恵む働き」として観ることである。つまり、キリストの働きは、自己の内に観ることも出来るし、同時に自己の外に観ることも出来るのである。ということは、キリストの働きは内にも外にも固定化して对象的に観る一つ実体化出来ない命の滾りたぎその事だといえる。にもかかわらず、キリストを自己の外に実体として対象化して

のみ観てしまうなら、それは一種の偶像礼拝となるのではないか。

×

×

パウロは、働きとしてのキリストを、神の愛として信受する。「キリストの愛が私たちに強く迫っている」と言う。(コリントの信徒への手紙二 五章一四節)

働きとしてのキリストは、まさに、迫り、促し、保とうとする大いなる命の滾りとしての動的な事実なのである。

だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難かんなんか、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か、……わたしたちを愛してくださった方によって輝かしい勝利をおさめています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできません。(ローマの信徒への手紙八章三一以下)

パウロは、このキリストが自己の存在の根底に主体として働いていることを知り、同時に、自己がそのキリストに恵まれて在ることに開眼したのである。このようなキリストの働きの事実を、

彼は復活のキリストの顕現に於いて直接経験した。直接経験とは、どのような言説をも媒介せず
に、自己の存在の根源、世界の根源を全身で掴み取り、自分の血肉で覚え、悟ることである。

×

×

確かなる者の言説は、彼の直接経験の述語として生まれてくる。その意味で、直接経験を欠いたままで言説を弄するのたぶらは空虚な戯言たぶらにしかすぎないといえる。そこで、どのような偉大と思われる論議であろうと、また、謙虚なそれであろうと、真実からは遠い。

使徒パウロの言説は、彼の直接経験つまりキリストへの開眼から領解された言語表現である。

この一点を覚えることなく、彼の信仰を理解しようとするなら、ただのドクマを論議する者、または、虚しく聖書の言葉に執着する小市民的善人に墮するだろう。

×

×

聖霊によらなければ、だれも、「イエスは主（キリスト）である」とは言えない。（コリントの信徒への手紙一 十二章三節）

とパウロは言う。

世の人は、これはキリスト教徒のことで、それ以外の人にとっては何の意味もないことだと思
っている。たしかに、表面的にはそのように言えるだろうが、パウロが語っている内容を純化し

てみると、すべての人が、必ず心得ていなければならぬ大切な一点を示唆していることに気づく。

×

×

彼が言うところの「聖霊によらなければ」とは「人の計らいを越えた神の働きがなければ」ということである。また、「イエスは主（キリスト）であるとは言えない」とは、「自分を含めた一切の存在の根源の命の働きを知ることが出来ない」ということである。

つまり、「聖霊によらなければ、だれも、『イエスは主（キリスト）である』とは言えない」とは、「人の計らいではなく、神の働きがなければ、だれも、『全の存在の根源の命の働きを知ることが出来ない』ということである。

×

×

かつてイエスは、「人はパンのみで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」と言われた。それは、「人は物を食べるその人の努力と配慮とによって生きるのではなく、神の一時一瞬の働きとその配慮によって生かされる」という意味である。この根源的な私たちの生の秘儀は、神の働きかけがなければ知ることが出来ないことを語ったのが、先のパウロの言葉である。その意味で彼が指摘する生の根源的事実は、私たちすべてにとって直接関わる事実であり、だれであろうと「私には無縁のことだ」などと言えない。

しかし、根源的な命の働きの事実気づく人は少ない。なぜなら、私たちは何時も肉的な意識と感覚で生きているからである。これについてパウロは次のように言う。

肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。(ローマの信徒への手紙八章五節)

彼は、その人の考えが、肉的事であることを「肉の思い」と言い、霊的事であることを「霊の思い」と言う。この場合の「思い」とは、その者が下す実際の判断と意識のあり方のことである。従って、「肉の思い」とは、根源的な命の事実を知ることなくただの自我意識に基づく認識と判断一般のことである。そのような者は、自我を越えて働く根源的な命の働きに全く気づくことはない。

生の根源的な命の働きの事実直接開眼することを「直接経験」という。「直接」とは、一切の肉的な働きを媒介としないという事である。つまり、肉的な自我意識を用いることなくという意味である。

肉的な自我意識が生み出す願望がある。それらは一般に理性的な倫理認識を基準にして善悪に分けられる。そして、善の究極に神が立てられ、悪の究極に悪魔が立てられる。その結果、理性的な倫理認識に於いては、善に生きることをもって正義とし人間の正しいあり方とする。そのあり方を規定し方向付けるものとして、神の名による「律法」が要請され、その律法に従って生きることをもって正義または善となし、神に生きる者のあり方、つまり人間の有るべき姿としての当為とする。これこそ「律法主義的生」にほかならない。

パウロはそのような思いと在り方を「肉の思い」又は、「肉に従って歩む在り方」「肉に属する在り方」と言い、それをローマの信徒への手紙八章で語った。

十四 再度律法主義について

私たちはここで、もう一度、律法主義的生が持っている偽善性とその問題性とを「律法と福音」又は「贖罪と義認」という構図の中で確認しておきたい。律法的な規範に生きることによって、自分を神の前で完成させようとするあり方が律法主義的生である。それに対して「律法」の規範によって完全に生きることが出来ない自分（それは律法違反の罪人^{つみびと}）に代わってイエスが死をもって（十字架にかかって）「贖罪」して下さることで律法的生を完成して下さり、神の前で、

義ただしく生きる者としてくださったことを「福音」という。このように「律法と福音」「贖罪と義認」という構図で人間とその救済を説くのがキリスト教会である。ここには常に大きな落とし穴が隠れている。しかし、大方の熱心なキリスト教徒や教会は、この部分に少しでも異論をはさむと、たちまちヒステリックに騒ぎ立てる。曰く「それは異端だ」「聖書を正しく理解していない」「神に敵対する悪魔だ」「そのような者たちには近寄ってはいけない」「そのような人達が正しく福音を理解するように寛容をもって祈ってあげましょう」等々。

×

×

パウロが正面から取りくんだ問題とはなんであつたのか。それは、「律法による義」の問題性と「律法主義」からの開放、または克服ということであつた。この問題は、彼自身が生々しく体験し、且つ克服したことである。彼は机上の空論として観念の世界だけで理屈を弄したのではない。彼は他のだれにも増して苦しみ、戦い、努力し、遂に克服した。それについては既に幾度も述べて来たが、ここで再度彼が律法主義的生を克服したときの告白の一つに耳を傾けてみよう。

わたしたちは神の靈によつて礼拝し、キリスト・イエスを誇りとし、肉に頼らない。……もし肉に頼ろうと思えばわたしは頼れなくはない。だれかほかに、肉に頼れると思う者がいるなら、わたしにはそれ以上に頼ることが出来る。わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの

民に属し、ベンニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関しては一ツアリのサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者律法の義については非のうちどころの無い者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失とみなすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを深く知ることの圧倒的な価値のゆえに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえにすべてを失いましたが、それらを塵あくたとみなしています。それはキリストを得、キリストの内にいる者であることを見出すためであり、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義であります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかってその死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中から復活に達したいのです。（フィリピの信徒への手紙三章三節以下）

×

×

パウロはキリストを直接体験したのである。贖罪と義認という構図ではなく、一切の肉体的な配慮、つまり努力や論理を越えて直接に存在の根源、生の根源的な命の事実、つまりキリストその事を、神の働きである聖霊によって直接体験したのである。そして、そこから「贖罪と義認」「律法と福音」という世界を見ると、それは未だ「肉の思いの世界」の領域内の事柄に過ぎないことを発見した。

パウロはキリストによる贖罪に、律法の完成を見たのではなく、神の恩恵を見たのである。恩恵とは、神の一方的且つ神の無条件の共存、即ち徹底した愛アガペの事実を言う。この、神の愛の事実こそ、存在の根源、生の根源的な命の事実、命の滾り、即ちキリストそのことなのである。そのキリストの直接体験を彼は、「キリストがわたしの内で生きている」また「キリストの内にわたしを見出す」さらに、「わたしにとって生きることはキリストです」と言語化したのである。このような直接体験を抜きにして、聖書に執着する者はただの教条主義者、ただドクマに捕らわれる合理主義者、ロマン主義者、ただの信念の人に過ぎない。ましてや直接体験を抜きにして神学を振り回す者は、ただの「この世の論者」にしか過ぎないのではない。

×

×

神の国は言葉ではなく力にあるのである。(コリントの信徒への手紙一 四章二十節)

「神の国」とは、神の領土という固定した場のことではなく、神の統治力が働くその事である。だからパウロは、神の国は神の霊による義と平安と喜びの躍動そのことだと言う。(ローマの信徒への手紙十四章二十節) 正に、神の国は神の命の滾りのそこにある。その事実を彼は、神の国は言葉ではなく力である、と言った。

そのような神の国をパウロは直接体験した。その事実を彼は言語化して「キリストがわたしの

内に生きている」又は「キリストの内にわたしを見出す」と言い、更に「わたしにとって生きているのはキリストです」と言った。

×

×

イエスは、「神の国はあなたがたの中にある」と言われた。(ルカによる福音書一七章二節)これは、神の統治の働きその事、即ち、神の大いなる命の滾りそれ自身が、始めから終わることなく人の内に躍動し続けている事実を指摘されたのである。しかし、その事実は人が自覚的に受容しないかぎり、その人にとって現実とはならない。それゆえに、「神の統治(支配)は実にあなたがたの中に起こるのだ」ということも出来る。

パウロは神の統治の事実を直接体験することによってそれを自覚的に受容した。その事を彼は、「キリストを信じる信仰によつて」と言う(ローマの信徒への手紙三章二二節、ガラテヤの信徒への手紙二章一六節)。そこに於いてパウロの内から自然に発語された言葉が「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節)であった。パウロのこの告白は、自我による発語でありつつそのよつて出てきた根源は、パウロの自我を超えた霊的自己であるキリスト、即ち神の大いなる命の滾りが生み出した「聖霊による言葉」である(コリント信徒への手紙一 一二章三節)。

×

×

ここで注目したいことは、彼は、神を存在の根源として対象的にではなく、命の滾りとして、動的に直接体験していることである。かつて、彼は復活のキリストを自分の内に直接体験したが、それはイエスが肉体的に再び蘇り、永遠の命に生きるようになられたという存在論的なキリスト認識ではなく、神の大いなる命の滾りとしてのキリスト、即ち、義と平安と喜びとして躍動する命を直接体験したのである。正に「神の統治（支配）は言葉にではなく力にあるのである」とは、そのことであろう。

×

×

パウロは「神は力デユナミスにあるのである」と言う。力デユナミスとは、神の創造力、保持力、完成力つまり、神の全能力である。それは奇跡を生み出す力でもある。彼は言う。

働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人一人に、「霊」の働きが現れるのは、全体の益となるためです。ある人には「霊」によって知恵の言葉を語る力が与えられ、ある人には同じ「霊」によって理解する力が与えられ、ある人には唯一の「霊」によって病気を癒す力、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、……これらすべてのことは、同じ唯一の「霊」の働きであって、霊は望むままにそれを一人一人に分け与えて下さるのです。（コリントの信徒への手紙一 十二章四節以

下)

世界が創られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることが出来ます。したがって彼らには弁解の余地がありません。なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえってむなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなっているからです。(ローマの信徒への手紙一章二十節以下)

×

×

神がまず存在して、その神が働くのではなく、神の事実は働くことのうちに御自身を啓示するのである。働くとは命の滾りであり、デユミヌス力そのものなのである。つまり、神とは即働きであり、働きが即神なのである。神は存在論的な静なものではなく、動としての創造力、保持力、完成力として将来的に、永遠的に現在の事なのである。そのように躍動する命の滾りとしての動きその事が聖書の神であり、パウロの神なのである。

この創造的な働きとしての神をパウロは刻々と自分の内に外に、脚下に、全存在に直接体験した。それだからこそ彼は自己の全存在をかけて告白する。「キリストがわたしの内に生きており」「キリストの内にわたしを見出し」「わたしにとって生きるとはキリストなのである」と。

十五 パウロの福音理解

パウロが直接体験によつて開眼した神の大いなる命、つまり命の滾りそのことであるキリストについての開眼は、律法主義的義認としての人間救済を無効となす。従つて、それを根拠として成り立っている贖罪も、その意義が無くなる。しかしパウロは「贖罪」も「義認」もその表現を捨てない。ここにパウロの福音理解の矛盾が生じて来て、多くパウロの信仰を誠実に学ぶ者に戸惑いを覚えさせて来た理由がある。

しかし、パウロはそれ故に、ユダヤ教的贖罪と義認解釈を再解釈することによつてその表言を保つた。つまり、神とわたしという主體的な關係に於いて律法と律法違反としての罪を引き受け、贖罪も義認も救済も主體的に引き受けた。つまり、「神とわたし」という關係に於いて信仰をみるのである。その結果、彼は神の大いなる命の滾りを直接体験することにより、イエスの十字架の死を、神の一方的で無条件の徹底した愛、全き、恩寵として信仰によつて受け入れるのである。そこでは、贖罪も義認も救済も神の恩寵、神の義以外の意味は持たなくなつた。したがつて、それはただ「信仰によつてのみ」拝受するだけとなつた。「すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義」（ローマの信徒への手紙三章二一節）と彼が言う所以である。

の死とキリストにある生に開眼したのである、それは同時に、自我による配慮の生よりも深い神の命の滾りそのものである真実の自己についての信仰による覚かくであった。そこでは「律法と福音」「贖罪と義認」という人間救済の構図は、いわばパウロ的な人間救済の有り難き方便として相対化されるのである。にもかかわらずそれを唯一絶対の真理として、一切を排除する救済の教義と化するとき、この世のすべての宗教的救済の論理とそれに生きる人を否定することになる。パウロの福音理解を純化するとき、そこには人間の実存的主体性の真の救済の論理が宗教的に見事に展開されており、すべての人が信受できる真理である。真に人間を本来的生に導き活かすこの聖書の福音を教会は、ただの「キリスト教の独善ドクゼン的教義」として倭小化してはならないと思う。

×

×

各自は、惜しむ心からでなく、また、強いられてでもなく、自らみづか心で定めたとおりにしなさい。(コリントの信徒への手紙二 九章七節)

これは、他教会への援助献金についてパウロが語った、献金の心構えであるが、この言葉にパウロの信仰が如実に現れている。

金銭は、人の血の一滴一滴といわれるほどに、私達の生活に深くかかっている。それだけに、金銭に対する態度は、その人の生き方そのものを示す。

パウロは不承不承むじやうぶじやうの思いをもつて献金をするな、と言う。また、強制されて献金をしてはならないと言う。献金は自分の思いに従つてしなさいと勧める。パウロは当たり前のことを言っているのだが、それが、パウロの何処から出て来た言葉なのかということ問うてみると、パウロの生き方の根つこのところが見えてくる。

X

X

パウロの言葉が出てくるところは「神の智慧」であつて「人の智慧」ではない。人の智慧は何時でも何処に於いても自分の利害得失に配慮する利己的な自我の智慧である。得する自分でありたい、損をする自分でありたくない。多くの人から褒められる自分でありたい。立派な行いをする自分でありたい。權威と名誉を持つ自分でありたい。神に救われる自分でありたい。等々。とにかく人の智慧は、限りなく自分自身に配慮する。

智慧とは働きに於いて現れてくる事である。人の智慧とは、限りなく自分自身に関心を向け、配慮する働きである。その在り方を彼は「肉の思い」「肉の働き」と言った。

肉の働きは明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、妬みたがみ、泥酔、酒宴、そのたぐいのもです。以前に言つておいたように、ここでも前もつて言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐこ

とは出来ません。(ガラテヤの信徒への手紙五章一九節以下)

パウロが、このように人の行ないの一つ一つをあげつらうのは決して、その不道徳を非難するためではない。彼が注目するのは、それらが、出てくる思いの正体についてである。それを彼は「肉の思い」と言った。それは人の深くに主体として働く「人の智恵」としての自我そのものの問題性なのである。つまり、それらはすべて自分自身に対する配慮に基づくものである。すでに、学んで来たとおりに、パウロが深く関心を向けることは、たんなる不道徳ではなく、むしろ不道徳を超えたところから出てくる、人間の奢りせりや高ぶり、つまり自我高揚の思いそのものである。善人になろう。義人になろう。価値ある人間になろう。不道徳人間にはなるまい。もっと努力して神に喜ばれる人間となろう、……。そのような自分に対する熱心な配慮が、あろうことか、さきに掲げた「肉の働き」が生まれて来た利己的自我高揚の主体の働きと同じである事を看破する。つまり、問題は、姦淫するかしらないかではない。泥酔するかしらないかではない。人に対して妬みや恨みやそねみを持つか否かではない。それらのことを行ったか行わないかという徳目の是非のことではなく、それらの善悪にかかわらず、それらを生み出す主体の質としての「人の智恵」そのものが自我の働きであり、そこに人間存在の根源的な問題性を見事にめぐり出したのである。ここに信仰の人としてのパウロの面目がある。その状況を彼はおきて掟との関係に於いて働く自我高

揚の罪をローマの信徒への手紙七章で告白した。

命をもたらすはずの掟おきてが死に導くものであることが分かりました。(ローマの信徒への手紙七章十節)

×

×

パウロの面目は、問題をえぐり出すにとどまらず、そこから自分を救い出し人を其の命に生かす道を見出したところにある。それこそが、十字架につけられたキリスト・イエスへの信仰である。

彼は、イエス・キリストの十字架の死を、ユダヤ教的発想に基づく義認としての贖罪死というペテロを中心とするパウロ以前のエルサレム教団の理解を先ず受入れたが、その贖罪死を神の一方的な人間救済のための恩恵、恩寵、徹底した神の愛だと再解釈し、その恩寵を信ずる信仰によって生きるところに人間救済の道を見出したのである。その場合彼は、最初に受け入れた贖罪概念を捨てないままで再解釈したのである。

彼が直接体験した復活のキリストの顕現は、まさに神の一方的な愛、恩恵、恩寵であり、罪または悪と死とに対する勝利であり、そのキリストを信ずる信仰は、悪と死のもとにある人間が神の愛に生かされる根拠であり道なのである。その生の事実を告白したのが、「キリストがわたし

の内に生きている」であり「生きることはキリストである」ということである。

×

×

パウロの信仰理解は人の智慧によるものではない。自我高揚の智慧から生まれ出たものではなく、人の智慧の否定、自我高揚の消滅したそこから、つまり、「わたしの内に生きるキリスト」から生じて来た「神の智慧」による。

信仰に成熟した人たちの間では智慧を語りません。それはこの世の智慧ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの智慧でもありません。わたしたちが語るのは、隠されていた神秘としての智慧であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界が始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちにはだれ一人、この智慧を理解しませんでした。もし、理解していたら、栄光の主を十字架につけなかつたでしょう。しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」と書いてあるとおりでです。わたしたちには、神が靈によつてそのことを明らかにしてくださいました。靈は一切のことを、神の深みさえも極めます。人の内にある靈以外にいったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように神の靈以外に神のことを知る者はいません。私たちは世の靈ではなく、神からの靈を受けました。それでわたしたちは、神から与えられたものを知るよう

になつたのです。そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の智慧に教えられた言葉によるのではなく、靈に教えられた言葉によつています。つまり、靈的なものによつて靈的なことを説明するのです。肉に属する人は神の靈に属する事柄を受け入れません。その人にとつて、それは愚かなことであり、理解出来ないのです。靈によつてはじめて判断できるからです。(コリントの信徒への手紙一 二章六節以下)

×

×

パウロは「人の智慧」という自我高揚を限りなく生み出す自我の主体を、キリストを直接体験することによつて放棄させられ、真に自己を生かす「神の智慧」という靈的力に開眼し、それが、自分の内に生きる主体であることを知つたのである。結局、彼がイエス・キリストの十字架の死と復活とに於いて開眼したことを鈍化してみるならそれは、自己の存在の根底にあつて自分を自分たらしめ生かす真の主体に開眼したと言うことになる。その時、彼は、愛と栄光に満ちた、滾る命そのものとして今を生きる自分を発見した。その事実を「生きることはキリストです」と歓喜したのである。

キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によつて死んでいても、靈は義によつて命となっています。イエスを死者の中から復活させた方の靈が、あなた方の内に宿っているなら、

キリストを死者の中から復活させた方は、あなた方の内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かして下さいます。(ローマの信徒への手紙八章十節以下)

こうしてパウロの信仰を知るとき、彼が先に献金について語った言葉の内容がハッキリと見え
てくる。つまり、「惜しむ心」「強いられる心」は人の智慧そのものからであり、「自ら定め
る心」は、「神の智慧」から生じた霊的な命の現れである。(ガラテヤの信徒への手紙五章二二
節以下)

×

×

わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価しては
なりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった度合いに応じて慎み深く評価すべきです。
というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分があるが
同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づく
っており、各自は互いに部分なのです。(ローマの信徒への手紙十二章三節以下)

十六 教会の現成

人々が、神の命の働き、即ちキリストに生かされる時、そこに一つの安定した出来事が現成して来る。その安定した出来事は「教会」^{ニクレシヤ}となる。それを、パウロは「キリストの体」と言った。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。……あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分である。(コリントの信徒への手紙一 十二章一二節以下)

×

×

パウロにとって「教会」^{ニクレシヤ}とは、人々が集まって形成された固定的なただの集合体ではない。つまり、ある特定の主義や主張、または教義や理論があつて、それに共感し賛同した一人一人が集まって出来上がった集合体^{ニクレシヤ}が教会^{ニクレシヤ}なのではない。パウロは教会を「体」^{カミタ}に例えたのには意味がある。それは体とは、その部分が全体であり、全体が部分として成り立って命している出来事だからだ。即ち、私たちの体の部分は一つ一つそれ自体で在るのではなく、一つ一つの部分が互いの関わりに於いて命しているそこに於いてこそ、部分が部分としてあると同時に全体があり得るのが体^{カミタ}である。具体的に言おう。例えば、心臓は、他の臓器との関わりにおいて、はじめで心臓と成るのであつて、心臓だけで心臓なのではない。他の臓器と個立したところでは、心臓

としての機能は失われ、ただの物となる。一方、心臓は他の臓器と関わることによって、他の臓器、例えば肺を機能させ、それによって肺は肺となる。このように、体は、多くの部分から成っているが、それはただの部分の集合体ではなく、部分相互の関わりに於いて部分と成らせられ、成らせられた部分の働きが、おの自ずと体からだという出来事を現成させるのである。そのようにして現成した出来事を、パウロは「教会エクレシヤ」と言った。むしろ、そのような出来事にパウロは、教会を見た、と言つてもよい。以下、パウロの言うところに耳を傾けてみよう。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言つたところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし、体全体が目だつたら、どこで聞きますか。もし体全体が耳だつたら、どこでおいをかぎますか。そこで神は、ご自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になつてしまつたら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があつても、一つの体なのです。目が手に向かつて「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かつて、「お前は要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえつて必要なのです。わたしたちは、からだの中でほかよりも恰好かっこうが悪く思われる部分を覆おほつて、もつと恰好よくしようとし、見劣りする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それ

で、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。(コリントの信徒への手紙一 十二章十四節以下)

パウロは部分と全体、個と全体のことを述べている。部分の集まりが全体ではなく、全体は部分のただの集まりではないと言う。部分があつての全体。全体あつての部分だと言う。即ち、部分即全体、全体即部分だと言うのである。くだいようだが具体的に言おう。松下という私は、私の部分の集合体ではない。わたしの身体を分解して、ただそれを集めてみても松下という私にはならない。松下という私の人格は、個々の部分が互いを互いに必要とした関係において、互いが成り、そのまとまりのそこに、自ずと生まれて来る出来事が松下という人間であり人格なのである。

×

×

だが、もう一步、部分の關係に目を向け、全体を考えてみよう。個々の關係は、互いに必要とするので關わる關係ではない。そのような關係は自分の存在維持のための利己的な關わりである。そのような關わりから真に安定した全体は生ずることはない。本當に安定した全体が生まれて来るためには、個々は、他個たごのために自分を捧げる關係でなければならぬ。例えば、腸は腸自身

を維持する為に胃に関わるのではない。また胃は胃自身を維持するために腸に関わるのではない。胃も腸もただ無心に自分の勤めを果たすことが即互いを胃として、腸としての個を成り立たせているのであり、すべての臓器がそのように在ることによって、安定した健康な身体が結果として現れるのである。そのような個と個の関係のあり方を「愛」^{アガペー}という。だからこそ、パウロは先に掲げた語り^{かた}に続いて一三章で「愛」について語り、「すべての行いに愛がなければ一切は虚しい」と言う。その意味は、愛がなければ、何事も意味を失い完成しない、ということである。だからこそ彼は、「いつまでも残る最も大いなるものは愛である」と一三章を結ぶ。(コリントの信徒への手紙一 一三章)

×

×

このような愛とは、いわばキリストの内容だと言える。それ故に、「私たちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており」キリストの体なる教会を生み出すのだと、パウロは言う。

「キリストに結ばれる」とは、「キリストにある」ということであり「キリストに包まれている」ということである。その意味は、「キリストに支えられ、受け入れられ、キリストの働きの領域の中に置かれ、さまざまな賜物を頂いて本来的な生が自ずと成り立つてくる」ということにはかならない。個々の人がキリストに結ばれその関係が愛に変容させられるとき、そこは自ずと

キリストの体なる教会が生まれて来る。個々の計らいがキリストの体を生むのではなく、個人がキリストに結ばれたときに個人の計らいを超えしめられ、そのような個人の関わりが自ずとキリストの体としての教会を現成させるのである。それ故に、「キリストにある生」とは、キリストの支配を自己の生の根底として生かされることである。そのような生は、同時に、キリストを自分の主体として生かされることでもある。この状況をパウロは、「われキリストキリストにあり」と言い、同時に、「キリストキリストわが内内にある」と言う。そして、「生きることはキリストです」という表言に於いて自己の生の事実を的確にパウロは言い切った。このような生に人が生きるとき人格共同体としての「キリストの体」なる教会が自ずと歴史的な現実として現成し形あたまれてくる。このよ
うな教会は「神の支配」の現れでありキリストの形である。

その意味で、「教会エクレシヤ」が、キリストに生かされる命の現実を知らないままで、ただ、聖書の文字面や信仰の教義を規範として形成される集団と化するなら、それは、ただの主義主張によって統一された宗教風党派的独善的な集まりか、又は聖書趣味愛好家の仲良しクラブになってしまうだろう。

個人×の在り方、家族の在り方、社会の在り方、国家の在り方、世界の在り方、宇宙の在り方×を

問うとき、その絶對的な安定の在り方が因よつて現成して来る根源は、神の支配としてのキリストの働きにある。まさに、「わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくり」というパウロの言うところは、全宇宙が完成する秘儀なのである。独り一宗教としての、所謂「キリスト教」の話ではない。このような意味でのキリストの体の姿を、私は「創造に於ける自然」と表言してきた。

松 下 昌 義
1931年生まれ
左京キリスト教会牧師

「私の問い続けてきたこと」(中) みちしるべ文庫 18
—パウロの信仰—

1998年9月10日

著 書 松 下 昌 義

発行所 左京キリスト教会
京都市左京区下鴨南茶の木町 29

印刷所 片桐軽印刷(有)
